

コロナ時代にこそ 少人数学級の拡大を

個人質問 さいとう愛子議員 (9月17日)



9月17日、本会議で、さいとう愛子議員が「コロナ時代の学校のあり方」について質問しました。

はじめに、6月定例会以降、文科大臣が「来年度予算に反映させるよう準備を進める」「リーダーが変わっても少人数学級の重要性が変わることではない」（9月1日記者会見）と述べたことなどを紹介し、あらためて少人数学級についての認識を教育長にたずねました。教育長は「6月定例会において答弁させていただいたとおり、慎重に判断する必要があると認識している」「国の動向については、今後も注視して参ります」とこたえました。

そこで、全国知事会・市長会・町村町長会が連盟で文科大臣に提出した、現行の40人学級では新型コロナウイルスの感染防止は困難として、公立小中学校で少人数学級を早急に導入するよう求める緊急提言を引用し、同様の認識を教育長は持っているかと確認しました。教育長は「私どもも認識いたしております」とこたえました。

続いて、「慎重に判断する必要がある」のは、教員や教室の確保が困難だからなのか、それともこれまでどおりの40人学級でよいと考えているのかと質問すると、教育長の明確な答弁はなく、文科省の衛生管理マニュアルに沿って感染拡大防止に努めると繰り返すにとどまりました。

さいとう議員は「国の動向を注視するだけでなく、コロナ時代の今こそ、少人数の学級編成とそのための教員の増員を国に強く求めていただきたい」と要望しました。

小中学校の統廃合計画は見直しを

さいとう議員は、守山区の森孝中学校区の3つの小学校（いずれも小規模校）を廃校にして、小中一貫校にする計画では、児童・生徒のひとりあたりの校地面積や運動場面積が現在の半分以上となることを示しました。子どもたちを集め、密な学校にしてしまうのは、コロナ時代の学校のあり方に反しているのではないかと指摘。

教育長は「『小規模校には「人間関係の固定化が生じやすい』『体育の球技など集団学習に制約が生じる』』という課題を解決するために望ましい学校規模を確保する必要がある」との考えを示しました。また、「感染拡大については、保護者や地域の皆様に丁寧に説明しながら統合に向けた取り組みをすすめる」と付け加えました。

天白区の高坂小としまだ小の統合について、高坂学区の保護者の声（右）を紹介し、コロナ時代には高坂小のような現在も近い将来も20人程度の学級編成となる学校が理想であり、密な学級にしてしまう統廃合計画は逆行するものではないかと述べました。

さいとう議員は「高坂小をしまだ小に統合する計画について、教育長は高坂小の保護者や地域住民の十分な理解が得られているとはおこたえになりませんでした。このもとで、統合ありきで、話をすすめるのは問題です」と計画の見直しを求めました。

「高坂小学校を存続させる会」通信 3

新型コロナウイルスの蔓延から学んだこと

保護者の声の紹介

「高坂小学校を存続させる会」通信